

## カントに於ける必然的存在者の概念の研究（四）

草 野 章

第四アンチノミーに於いて考究された必然的存在者の概念は、経験の沃野を全く超越するものではなかった。それは「超越論的理念」ではあるが、「超越的概念」ではなかったのである。宇宙論的理念としての「世界」全体の統一を目指す理性は世界系列の絶対的総体性を追求し、その絶対必然的制約を「無制約者」に見出さざるを得ない。この「無制約者」が現象の力学的綜合に於ける最初の、従つてそれに後続する全系列の絶対必然的制約と見做されるが故に、それ自身はまた決して被制約者たりえない「起始」項とも見做されるうるし、或いは、系列の各項である「被制約者」に対する制約の系列の絶対的全体<sup>1)</sup>（この場合理性の追求は無限背進となる）とも見做されうることによつて、「無制約者」たる必然的存在者を廻る第四アンチノミーが招来される。しかしそれは前稿で確認したように、我々の経験の対象たる世界の地盤を決して離れるものではなかった。人間のふたつの直観形式たる時空はそのまま経験の全対象である世界の形式であり、従つて世界は人間の認識の対象となる限りでの

「世界」と呼ばれうる。それ故これを「無制約者」の探求の基底とする限り、その探求は決して「超越的」たりえないのである。これに對して「超越論的理想」では「全く経験の対象たりえない」必然的存在者の概念が考究される。それは「物一般の純粹概念<sup>2)</sup>」であるが故に、その探求は「感性界の外<sup>3)</sup>」に踏み出さざるを得ない。飽くまでも経験の領野に踏み止まる「超越論的分析論」では経験の可能性の制約としての、経験と知識のア・プリオリな構造が開示されたが、これに對して或る意味で『純粹理性批判』を二分するこの必然的存在者の概念の探究は経験の地盤を離れた対象に関するカントの思考の内実を開示することを予期せしめるのである。周知の如くカントは『純粹理性批判』第一版序文に於いて「私から経験のあらゆる素材と助力が奪われた場合に、私は理性を以てして如何程のことを成就すると望んでよいか<sup>4)</sup>」という問が批判哲学の課題として投げかけられると述べている。今触れた如く超越論的分析論は経験と知識のア・プリオリな構造の究明という形でこの問に込えているが、必然

的存在者という、経験を全く超越した概念を廻るカントの思索は如何なる形でこの間に答えんとするのであろうか。しかもそれは「人間の本性にとってどうでもよいことではありえない」形而上学的対象のひとつなのである。形而上学的問題は「理性そのものの本性によって課せられる」ものであるからして、理性はこれを決して斥けないのであるが、しかし経験を全く超越した対象が扱われるため、理性がこれに対して究極的解決を与えることは抑も不可能な問題なのであった。必然的存在者の概念を前にして、回避することもできず、しかも解答することもできないという窮地に立たされた理性の思索は如何なる運動形態を取るものであろうか。現象の系列の絶対的統一を求める理性は決して経験の領野に満足しない。経験の統一は悟性によって齎されるが、経験は決して完結することがないが故に、理性は経験の対象である現象の系列の絶対的統一を求め、経験の地盤を敢えて超越せんとする。そこに理性の不可避的仮象が生じるとされ、カントはこれを四つのアンチノミーに定式化した訳であるが、アンチノミー論の基礎となっているのは言うまでもなく現象と物自体の峻別である。現象の系列の絶対的統一を求める理性は経験或いは現象を超越して無制約者に赴こうとする。「理性は無制約者を物自体そのものに於いて、必然的に且つあらゆる被制約者に対する充分なる権利を以て要求し、しかもこうすることによって、完成せられたる制約の系列を要求するのである。」無制約者は現象に於いては決して見出されないが、物自体に於いて想定されうる、いやそれどころか理性の実践的認識を考慮に入れるならば想定されなくてはなら

ないものであった。現象としての物の認識と物自体そのものの認識を「弁証論は再び結合し、無制約者という必然的な理性理念と調和せしめる。」<sup>(9)</sup> それ故アンチノミー論は現象の地盤を決して離れるものではなかったし、上述の如く必然的存在者の概念が扱われる第四アンチノミーもその例外ではなかったのである。然るに、同じ弁証論に属するとはいえ、超越論的理想の章で扱われる必然的存在者の概念は徹頭徹尾物自体の認識に属するものとして考察される。それ故超越論的分析論の成果に照らし合わせるならばこの概念に関しては真なる認識が成り立たず、従って思惟は空転せざるを得なくなり、必然的存在者即ち神の問題は理論の領域から実践の領域へと移行することによって辛うじてその命脈を保つことになる——カントの必然的存在者の概念に関して哲学史は概ね斯かる見方をしてきたようである。勿論これはこれで正当な見方であろう。だがこうした概括的な見方は、一面で伝統的形而上学との深い繋がりを決して失うことのなかったカントのまさしく「形而上学的」な思索をあまり顧慮しないという憾みを遺すのではないか。カントに於ける伝統的形而上学を受容と変様という問題——『純粹理性批判』に於いてこれを解明する好適の材料を与えてくれるのが超越論的理想の章である——を本稿では必然的存在者の概念を手掛かりにして探ってみようと思う。

# 一

超越論的弁証論第二編第三章「純粹理性の理想」は全部で七節に

分かれていたが、先ずは第一節「理想一般について」に依つて「理想 (Ideal)」の概念を確定しておくことにしよう。

超越論的分析論に於いては純粹悟性概念⇨カテゴリーが、アンチノミー論に於いては理性とこれに由来する理性概念たる「理念一般」及び「超越論的理念」が論ぜられた。そして上の「純粹理性の理想」の章では「理想一般」と「超越論的理想」が提示される。周知の如く大まかな意味での思考能力の中で思惟の能力たる悟性と推理の能力たる理性が区分され、これに依じてそれぞれの認識能力が対象とする概念が区分される訳であるが、理性の場合には「理念」と「理想」という二つの概念を対象とすることになる。「思惟」と「推理」による区分は裏面から言えば「感覚」即ち「現象の質料」<sup>(11)</sup>を制約とする「客観的實在性」との繋がりの度合いに対応している。純粹悟性概念⇨カテゴリーは現象に関与しない限りは単なる思惟形式であるに過ぎないが、経験のア・プリオリな制約として現実の経験の内に具体的に表される。そして純粹悟性概念⇨カテゴリーが経験の制約となる限りに於いて、経験の領域には真理認識が成立する。経験の領域が「真理の国」<sup>(12)</sup>とされる所以である。純粹悟性概念⇨カテゴリーは現象の「質料」を秩序づけ、統一する認識の「形式」として元来「質料」と不可分の関係にあり、実際の経験認識に於いて両者は統合している。<sup>(13)</sup>従つて純粹悟性概念⇨カテゴリーは「理念」及び「理想」と比較すると、感覚が与える「客観的實在性」に最も強く関与するものである。次に「理念」(Idee)であるが、人間の経験は元来決して完結することがないので現象の完全な体系的統一の認

識は抑も不可能である。しかし理性は飽くまでもこれを追い求め、「無制約者」を想定して現象の完全な体系的統一を齎さんとする。そこにアンチノミーが不可避免的に生ずる所以があつた訳だが、経験の対象である現象の系列に関わる限り理念は経験が与える「客観的實在性」と完全に分離することがない。斯くして「理念はカテゴリーよりも更に一層客観的實在性から遠ざかっている」<sup>(14)</sup>が、「理念」は現象の系列の絶対的総体性という観点からするならば経験との繋がりを失つてはいないので、純粹悟性概念⇨カテゴリー程ではないが、上の「客観的實在性」との関与が保たれている。ところが「理想」の場合には「客観的實在性」との繋がりは皆無と言つてもよいであろう。「私が理想と名付けるところのものは理念よりも更に一層客観的實在性から遠ざかっているように見える。これの下に私が理解しているのは、具体相に於ける (in concreto) ばかりでなく、個体相にも於ける (in individuo) 理念、即ち理念によつてのみ規定可能な、いやそれどころか規定された個体 (ein einzelnes... Ding) としての理念なのである」<sup>(15)</sup>「個体としての理念」とは「汎通的規定」(die durchgängige Bestimmung)を受けた理念のことである。「個体としての理念」として規定されるためには、相互に矛盾したあらゆる可能的諸述語のうちそれぞれ一方のみが帰属しなければならない。このことが「個体としての理念」をそのものたらしめ、よつて以てその「完全性」を構成するのである。しかしこれらの事に関しては後に触れることにして、理想と「客観的實在性」との繋がりにについてもう少し追つて見よう。

理想は「全く完全なものの概念」<sup>(16)</sup>であつて、理性はこれを不完全なものの評定に用いるのだ、とカントは言う。カントはこれまでの哲学史に現れた理想の例証として、「あらゆる種類の可能的存在者のうちで最も完全な存在者であり且つ現象に於けるあらゆる模像(Nachbilder)の原根拠」としてのプラトンのイデアや、知恵という理念と完全に合致した「(ストア学派の)賢者」を挙げている。<sup>(17)</sup>カントの言う所によれば、これらの理想に対しては「客観的實在性(Objektive Realität, Existenz)」は認められないが、「だからと言って空想の産物とは見做され得ない」のである。<sup>(18)</sup>理想の存在性に関するカントの発言は随所で微妙な振幅を見せているのだが、それは伝統的形而上学の決定的な影響下にありながらも自らが創始した超越論的哲学という新たな地盤に立つカント自身の揺れ動く姿をそのまま反映しているのである。なるほど理想は感覚の対象とはなりえないから感覚にその根拠を持つ「客観的實在性」を有しないが、やはり何らかの意味で存在していると考えられるものなのである。たといそれが「専ら思考に於いて実在する(existiert)」<sup>(19)</sup>にしてもそうなのである。カントは理想を恣意的な概念と受け取られることを警戒してであろうか、これは「空想の産物」或いは「構想力の産物」ではないと幾度か述べている。<sup>(20)</sup>超越論的哲学の範囲では、感覚に由来する「客観的實在性」を理想に振り当てる余地は存しないが、それにも拘らず「完全」なものが存在しなければ不完全なものについての言表が抑も成立しないというプラトン以来の伝統的形而上学の見解に従えば、完全性の度合いに応じて存在の度合いが強くなるので

あつて、カントが「最完全者」としての理想に言及する時には常にこの事情が考慮されている。理想はイデアと同じく不完全なものが拠るべき「原型(Urbild)」<sup>(21)</sup>でもあるのだ。斯かるふたつの實在性概念を如何にして相互調和的に取り扱うべきか——超越論的理想の章はこの問題を廻る思索だと位置付けることもできるのではないかと思う。

以上で理想がプラトン以来の哲学史的伝統に則って「最完全者」として規定されており、それが超越論的哲学に於ける「客観的實在性」とは異なつた「實在性」を有するのではないかという問題が提起されうることが確認されたと思う。然るに「最完全者」或いは「個体としての理念」を構成するのは「汎通的規定」、それも「ア・プリオリな規則に従つた汎通的規定」<sup>(22)</sup>であるが、そのための「充分な制約が経験に於いて欠如している」<sup>(24)</sup>が故に、理想という「概念自身は超越的(transzendent)」<sup>(25)</sup>たらざるを得ない。斯かる超越的概念としての理想が「純粹理性の理想」第二節で論ぜられる「超越論的理想」である。

## 二

この節で超越論的理想に関して中心的に論ぜられるのは「汎通的規定の原理(Das Principium der durchgängigen Bestimmung)」<sup>(26)</sup>である。この原理によつて最高實在者或いは最完全者の存在に達することが期待されるのである。先ずこれを詳しく見ていくことにしようと思う。「汎通的規定の原理」とは名目的には「あらゆる実在するも

のは汎通的に規定されている (alles Existierende ist durchgängig bestimmt)<sup>(27)</sup>」というもののだが、内容的には「或る物の完全な概念をなすべきあらゆる述語の総合の原則」というものである。個々の物は「規定可能性の原則 (Grundsatz der Bestimmbarkeit)」と「汎通的規定の原則」というふたつの原則に従うとされる。前者は、「相互に矛盾対当の関係にある各ふたつの述語のうち、ただひとつのみが概念に帰属しうる」というもので、矛盾律を根拠とした純粋な論理的原理であつて、認識の内容を捨象して専らその論理的形式にのみ関わるものとされる。これに対して認識の内容に関わるのが後者である。「各個物はその可能性という面からすれば更になお汎通的規定の原則の下に立つ。これに従えば物のあらゆる可能的述語のうち、それらがその反対の述語と比較される限り、ひとつの述語がその物に帰属せねばならないのである。このことは矛盾律にのみ基づくのではない。何となればこれは各個物を、ふたつの相互に矛盾する述語の関係を於いて考察するばかりでなく、更に物一般のあらゆる述語の総括としての可能性全体への関係に於いて考察するからである。そしてこれは可能性全体をア・プリオリな制約として前提するが故に、各個物を提示する際には、それが可能性全体に於いて有する持分 (Anteil) からそれ自身の可能性を導出する様態を以てする。それ故汎通的規定の原理は内容に関わるのであつて、論理的形式にのみ関わるのではない。これはひとつの物の完全な概念をなすべきあらゆる述語の総合の原則であつて、ふたつの相互に矛盾する述語のうちのひとつによって分析的に提示するという原則ではないのであり、

しかもひとつの超越論的原則を含む。それは即ち各個物の特殊的可能性に対する与件をア・プリオリに含むべき一切の可能性に対する質料という前提である。<sup>(31)</sup>」各個物がそれに固有の具体的規定を帯びたものとなるためには、現実に帯びている規定と矛盾する規定が当然論理的に排除されていなければならない。これは物を表象する概念に関してのみならず、物そのもの (物自体ではない) に関しても言ういうことである。「規定可能性の原則」は概念と物の両方に適用されるア・プリオリな原則であるが、これは飽くまでも形式的な原則なのであつて、物がその物であるためには如何なる具体的規定を帯びねばならぬかを示すことはない。それはただ物が或る規定を帯びているならばそれと矛盾する規定を帯びていくことはないと言つていくに過ぎないのである。これに対して「汎通的規定の原則」は物をその物たらしめる全規定を表現する「あらゆる述語の総合の原則」である。勿論或る述語がその物の規定のひとつを表現するならば、それに矛盾する述語は「規定可能性の原則」に従つて排除されないなければならないが、或る述語が適用され別の述語が適用されないということが抑も成立するためには、「述語の総括」が予め存していなければならない。カントはこれを「可能性の全体」或いは「可能的述語の総括 (Inbegriff aller möglichen Prädikaten)」<sup>(32)</sup>とも言う。斯くしてこれがあらゆる物がその物として規定されていることの「超越論的前提」であり、各個物にはその中でそれぞれの「持分 (Anteil)」たる「特殊的可能性」がいれば割り当てられていることになる。従つてあらゆる可能性を総括したものが「一切の可能性に対する質料」

として想定されることになる。

しかしながら物の完全な認識の超越論的前提となる「可能的述語の総括」は認識の総体性に関わるが故に「理念」たらざるを得ない。「汎通的規定」とはその総体性の面からすれば決して具体相に於いて表され得ない概念である<sup>(34)</sup>。所以である。そしてこれは「専ら理性にその座を有する」理念として「純粹理性の理想」と規定される。「さてあらゆる可能性の総括」というこの理念は、この総括が制約として各個物の汎通的規定の根柢に存する限り、総括を構成しているであろう諸述語に関してまだなお規定されていないけれども、そしてこのことによって我々はあらゆる可能的述語一般の総括以外には何も思惟しないけれども、仔細に探究してみるとこの理念が根源概念として幾多の述語を放出する (ausstoßen) <sup>(35)</sup> ことが見出されるのであって、それらの述語は派生的なものとして他の述語によって既に与えられている場合もあれば、相並び立つことが不可能な場合もある。そしてこの理念は汎通的にア・プリオリに規定された概念にまで純化し、このことによって、純粹な (bloß) 理念によって汎通的に規定された個体的対象の概念となるのであり、従って純粹理性の理想と名付けられなければならないことが見出されるのである。<sup>(36)</sup> 理念は現象の系列の絶対的総体性に関わるが故になお経験との繋がりを僅かながら保持しているが、理想は理念によるア・プリオリな「汎通的規定」を受けた「個体としての理念」であるが故に経験との繋がりは皆無と言つてよく、従つて「超越論的」ではなく、「超越的」概念という規定を帯びるのである。さて問題は「汎通的規定の原理」を導きの

糸にしてカントが到達した「可能的述語の総括」としての「純粹理性の理想」の「実在性」は如何なるものかということである。

カントはこの問題を考察するに当たつて、肯定及び否定と存在との関わりを予め明瞭たらしめんとしている。論理的肯定については明白な言表がないが、カントは超越論的肯定及び否定と論理的肯定及び否定とを、概念の内容に関わるや否やという観点から、相異なる対と見做しているようである。「あらゆる可能的述語を単に論理的ではなく、超越論的に即ちそれらの述語に於いてア・プリオリに思惟せらるる内容面から考量するならば、そのうちの或るものによつて存在 (Sein) が、他のものによつて非存在 (Nichtsein) が表象されることが見出される。<sup>(37)</sup>」論理的否定は概念に関わるものでなく、判断に於ける概念相互の關係に関わるものであるからして、概念内容を示すことはない。例えば「不死」という概念は「死」という概念内容を廃棄するものではない——これに對して超越論的肯定及び否定はそれぞれ存在と非存在に結び付く。<sup>(38)</sup> 超越論的否定は非存在そのものを意味し、それには超越論的肯定が對立せしめられるのであるが、これはその概念そのものが既にひとつの存在を表現するようなひとつの何ものか (ein Etwas) であつて、それ故実在性 Realität (事象性 Sachheit) と名付けられる。<sup>(39)</sup> 何となれば超越論的肯定によつてのみ、そしてこれが及ぶ限り、対象は何ものか Etwas (物 Ding) であつて、反對にこれと對立する否定は専ら欠如 (Mangel) を意味し、これのみが思惟せられる場合には物全体の (alles Dinges) 廃棄が表象されるのである。<sup>(40)</sup>」しかし超越論的否定は超越論的肯定の「欠



如」であるから、超越論的肯定を基礎にして初めて考えられる「派生的」概念に過ぎず、それ自体としては實在に関わるものない消極的なものである。従って超越論的理想は超越論的肯定のみから構成されており、しかもその総体なのである。各個物の汎通的規定はこれを「超越論的基体<sup>(41)</sup> (ein transzendentales Substratum)」として前提しており、各個物はその規定としての各々の「持分」たる可能的述語を超越論的に肯定されているが、その他の可能的述語に関して超越論的に否定されている訳である。しかし超越論的否定は消極的なものであるから、その意味するところは各個物に於ける或る可能的述語以外の述語の超越論的肯定が「制限」されていることに他ならない。この点に関してカントはスピノザと見解を同じくして「真なる否定はすべて制限 (Schranken) に他ならない」と言うのである。斯くして各個物の汎通的規定の超越論的な前提たる「超越論的基体」は全き肯定であり、従って肯定が超越論的である限り、あらゆる、しかも最高度の實在性を持つことになる。それ故「超越論的基体」は「全實在性 (All der Realität, omnitudo realitatis)」且つ「最高實在者 (ens realissimum)<sup>(42)</sup>」なのであり、各個物の汎通的規定はこれを制限することにその根拠が求められるのである<sup>(43)</sup>。

「汎通的規定の原理」は斯くして各個物への様々な可能的述語の帰属様態を表明する原理であると同時に、他面では一切の實在の根源たる「最高實在者」に至る原理なのである<sup>(44)</sup>。簡単に言ってしまうと、各個物は汎通的に規定されており、その規定を表現する可能的述語は超越論的肯定による「實在性」を有している、然るに各個物が有

する諸々の實在性は一切の實在性の総括たる「最高實在者」に由来する、従って「最高實在者」は最高度の實在性を有しているが故にその非存在は問題にならない、ということである。「最高實在者」の斯かる根本規定から幾つかの派生的規定が導出される。先ず第一にあらゆる物の「原型 (Urbild, prototypen)」であること。これに対してあらゆる物は原型から見ればその實在性が制限された、従って欠如した (mangelhaft) 「模像 (Kopien, ectype)」に他ならない。第二に「原存在者 (ens originarium)」であること。第三に「最高存在者 (ens summum)」であること。第四に「存在者の中の存在者 (ens entium)」であること<sup>(45)</sup>。

原型・模像若しくは完全なもの・不完全なものというプラトン主義に基づく伝統的形而上学の見解をカントがそのまま引き継いでいることが容易に看取されるであろう。斯くして「最高實在者」という超越論的理想はまさしく伝統的形而上学が「神」の名の下に思惟してきたものを表現することになる。「この理念を实体化することによって我々がこれを更に追求するならば、最高實在性という純粹な (bloß) 概念によって原存在者 (Urwesen) を、唯一、単純、充足、永遠等の存在者として、一言で言えば、これをあらゆる述定によってその無制約的完全性に於いて、規定しうるであろう。斯かる存在者の概念が超越論的意味に於いて思惟された神の概念である。そして純粹理性の理想は超越論的神学の対象なのである<sup>(46)</sup>。」

しかしながら超越論的理想は経験の領域に属することのない「超越的概念」であり、「客観的實在性」から最も懸け離れた所に位置す

るものであった。カントは勿論伝統的形而上学の見解をそのまま繰り返している訳ではない。我々がここにしている「純粹理性の理想」第二節に於ける彼の目的のひとつは斯かる理念が「誤って」「実体化」されうると指摘することにあつた。

### 三

「理性が、専ら物の必然的汎通的规定を表象するというその意図に對して、理想に合致した斯かる存在者の實在 (Existenz) ではなくただその理念を前提しているのは明らかであるが、それは汎通的规定の無制約的総体性から制約的総体性を、即ち制限されたものの総体性を導出するためである。」<sup>(49)</sup> この一文は意外な印象を与えるのではないか。上に見た如く「最高實在者」は「全實在性」と規定されていた筈である。それにも拘らずそれは「理念」だと言われているのである。カントは理想を超越論的神学の対象として規定した先の文章に続けて以下の如く述べている。「しかしながら超越論的理念を斯くの如く使用するならば、既にその規定と許容範圍を踏み越えることになるであろう。何となれば理性は理念をあらゆる實在性に関する概念として物一般の汎通的规定の根柢に置くが、この理念全体が客觀的に与えられていて自らひとつの物を構成するということを要求するのではないからである。こうした物は単なる虚構 (Erdichtung) であつて、我々はこれによつて我々の理念の多様を特殊な存在者としての理想に於いて總括し且つ實在化するのだが、こうしたことに對して我々は如何なる權能も有していない。それどこ

ろか斯くの如き仮説の可能性をそのまま仮定する權能すら有していないのである。」<sup>(50)</sup> ここには恐らく「實在性」概念の変様が語られているのではないか。「汎通的规定の原理」によつて到達された、伝統的形而上学に由来する「實在性」はそのままの形では維持されえないとカントは考えているようである。彼は自ら問うている、「理性は如何にして物のあらゆる可能性を、その根柢に存する唯一の可能性から、即ち最高實在性の可能性から導出されたものと見做し、しかもその次にこの最高實在性をひとつの特殊な原存在者に含まれたものとして前提するに至るのか」と。ここで伝統的形而上学からの離反が始まるようである——何故ならカントは「これに對する解答は超越論的分析論を審議することによつて自ずと生ずる」と言うからである。つまりカントは、アンセルムスやデカルト等の神の存在論的証明の主唱者達が完全性のひとつと見做してきた「實在性 (現存)」概念に換えるに、彼が創始した超越論的哲学に於ける「實在性」概念を以てするのである。彼の言う「實在性」は「現象に於ける實在性」であり、「感覺に對應するもの」以外の何ものでもない。<sup>(51)</sup> 即ち「實在性」概念が意味を持つのは感覺の対象が与えられる我々人間の経験の範圍内に於いてでしかないのである。「(現象に於ける) 物のものを構成するもの、即ちそれなくしては物が思惟されえないであろうところの實在的なもの (das Reale)」は与えられていなければならない。しかしあらゆる現象の實在的なものがその内に与えられているところのものは一切を包括する唯一の経験である。<sup>(52)</sup> カントはここで超越論的分析論に於ける主張を繰り返している。實在性を



有する対象の可能性が有意味に語られるのは可能的経験の領域を措いて他にはないのである。斯くして「汎通的規定の原理」もその意味を変えてしまふ。先に見たように汎通的規定の原理は、物が一切の可能的述語の総括と比較されて、相互に矛盾する可能的述語の各一对のそれぞれひとつが物に帰属せしめられるというものであった。そして超越論的肯定を表現する述語が多ければ多いほどそれだけ「実在性」が増すのであり、その究極に「超越論的基体」としての超越論的理想が想定されるのであり、これが「一切の可能性に対する質料」と言われるところのものであった。ところが経験が「実在性」の源泉ということになるならば、一切の可能的述語の総括ではなく、経験の対象の可能性の総括が物の可能性に対する「質料」ということになるであろう。「さて実際我々には感官の対象以外の如何なる対象も与えられないし、しかもそれらはひとつの可能的経験の脈絡以外の何処に於いても与えられない。従つてあらゆる経験的実在性の総括をその可能性の制約として前提しない限り、何ものも我々に、とつて、対象ではないのである。」<sup>(55)</sup>それ故汎通的規定は単なる個物の「汎通的規定」ではなく、「感官の対象」としての「個物」の「汎通的規定」に変ずるのである。「さて感官の対象が現象のあらゆる述語と比較され、しかもこれらによつて肯定的に或いは否定的に提示される場合にのみ、それは汎通的に規定されうるのである。」<sup>(56)</sup>超越論的肯定が存在に、超越論的否定が非存在に結び付くと言われている先の議論と比較すると、「実在性」概念の変様によつて「汎通的規定」の概念も変様したことが看取せられることと思う。我々が

現在検討している「純粹理性の理想」第二節はこの二つの「実在性」概念に基づく二つの議論が混在しており、統一的解释を困難ならしめているように思われる。勿論カントの結論は簡単であつて、我々は「自然的錯覚」<sup>(57)</sup>によつて「感覚の対象」に妥当する原則と「物一般」に妥当する原則を混同するが故に、一切の実在性の総括という理念を「実体化」するに至る、というのである。あらゆる経験的実在性に基づいて成立している個物を、「超越論的窃取 (die transcendente Subreption)」<sup>(58)</sup>によつて「一切の可能的述語の総括」たる物の概念と取り違えることが「実体化」の内実である。

物一般に関わる「汎通的規定の原理」と感官の対象としての物に関わるそれとはそれぞれの前提の認識論的次元が異なっており、これに依じて振り当てられる「実在性」概念も異なる訳である。カントは伝統的形而上学に於ける「最完全者」の概念をよく知悉しており、それを「全実在性 (omnitrudo realitatis)」と規定した。超越論的肯定が「存在」を表現する限り、全き肯定である「最完全者」はその非存在が不可能なものとなる。しかし「全実在性」は「物それ自体」の概念が汎通的に規定されたもの<sup>(59)</sup>であり、経験の対象が持つ「実在性」を決して持ち得ないものであった。カントはアンセルムス、デカルト及びライプニッツが共有していた、概念そのものの実在という思想に対して肯んじることが遂になかった。彼は「感覚に対応するもの」という超越論的哲学に於ける新たな実在性概念に基づいて伝統的形而上学を批判しようとする。概念と直観——認識の形式と質料が相俟つて認識を成立せしめるという超越論的哲学の

立場を維持せんとする限り、概念だけでは真なる認識の生じようがないのである。伝統的形而上学の古い枠組に新たな実在性概念を流し込んだ結果、「最完全者」の概念はその「実在性」を剥奪され、単なる「理念」または「統制的原理」に変ぜられることになるのであるが、実は「純粹理性の理想」第二節までは或る意味で神の現存在の証明を批判するための予備的考察である。第二節までの洞察に基づいてカントが如何にして在来の神の現存在の証明を批判してゆくのか——これを探るのが次の課題となろう。

### 【註】

使用したテキスト及び引用の仕方は前稿に倣う。

- (1) A412/B438-439.
- (2) A566/B594.
- (3) a.a.O.
- (4) a.a.O.
- (5) 「理想は世界概念と関係を有するが、これとは全く異なったものである」とカントは言っている(Vgl. A408/B435). 第四アンチノミーに於ける必然的存在者の概念と「純粹理性の理想」に於けるそれとはその内実が違ふことが改めて銘記されねばならない。
- (6) A XIV.
- (7) A X.
- (8) A VII.
- (9) B XX.
- (10) B XXI. Anm.
- (11) A20/B34.
- (12) A235/B294.
- (13) 感性和悟性が別々に考究せられるのは「孤立化的方法(isolierende Methode)」によるからに過ぎない。アリストテレスの「形相」と「質料」がそうであったように、実際の認識に於いて両者は不可分である。

- Vgl. A22/B36
- (14) A567/B595
- (15) a.a.O.
- (16) A570-571/B598-599.
- (17) Vgl. A568-569/B596-597.
- (18) Vgl. A568/B597. Realität は現代の Wirklichkeit の意味ではなく、元來 Sachheit の意味であることは夙に指摘されることであらう。Vgl. M. Heidegger, Kant und das Problem der Metaphysik, vierte erweiterte Aufl., Frankfurt am Main 1973, S. 83. 久保元彦『カント研究』昭和六十二年、創文社、三五一頁。
- (19) A569/B597.
- (20) Vgl. A568-569/B596-B597.
- (21) A570/B598.
- (22) 理想が上の「客観的実在性」とは異なった実在性を有することは、実践面に関してカントが述べていることから窺われる。理想は完全なものとして不完全なものの存在根拠だから、それは不完全なものの(模倣)の「原型」でもあるのだが、「原型」は不完全なものの評価規準としての機能も併せ持つ。特に道徳的概念の場合、こうした完全性の概念が欠如すると道徳的行為の規準に関して語ることが無意味となりかねない。カントがストア学派の「賢者」を「神の如き人間」と呼び、そこに行為の規準を要請するとき、「完全な人間」というこの理想は「純粹理性概念」として——感覚や構想力に淵源しないものとして——同時に道徳的観点から見た様々な行為の評価規準として「実践的な力」を有することが主張されているのである。「実践的な力」を有するためには当然何らかの意味で理想に実在性が付与されねばならないであらう。
- (23) A571/B599.
- (24) a.a.O.
- (25) a.a.O.
- (26) A572/B600.
- (27) A573/B601.
- (28) A572/B600.
- (29) Vgl. A571-573/B599-601.
- (30) A571/B599.
- (31) A571-572/B599-600. カントはこの箇所に続けてはば同趣旨のことを繰り返しているが、そこでは「物があらゆる可能的述語の総括と超越論的

に比較されるのである」と言い換えられている。

(32) A573/B601.

(33) A572/B600.

(34) A573/B601.

(35) a.a.O.

(36) A573-574/B601-602.

(37) A574/B602.

(38) 論理と存在、または真理値と存在との関係を廻る現代的な問題にも繋がるであろうが、本稿では立ち入らない。

(39) 註(18)を見よ。

(40) A574-5/B602-3.

(41) A575/B603.

(42) A576/B604.

(43) A575-576/B603-604.

(44) A605/B633.

(45) カントはここに選言的理性推理との対応を見ている。見方を変えれば選言的理性推理の超越論的基礎付けとも考えられる。

(46) これを久保元彦氏に倣って「汎通的规定の原則に基づく神の現存在の証明」と名付けてもよいであろう。久保元彦、前掲書、三八四頁以下。

(47) Vgl. A578-579/B606-607.

(48) A580/B608.

(49) A577-578/B605-606.

(50) A580/B608. ここでは「虚構」と言われているが、先には決してそういうものではないとされていた（Vgl. A569-570/B597-598）。概して「純粹理性の理想」第二節は繰り返しが多く、よく整理されていないという印象を与える。それは恐らくふたつの「実在性」概念の共在に由来するのではないかと思われる。

(51) A581/B609.

(52) a.a.O.

(53) Vgl. A581/B609.

(54) A581-582/B609-610.

(55) A582/B610.

(56) A581/B609.

(57) A582/B610.

(58) A583/B611.

(59) A576/B604.

(60) A602/B630.

〔付記〕

本稿は平成十一年度工学院大学総合研究所一般研究費による研究成果の一部である。

（くさの あきら 本学共通課程助教授 哲学）